

鹿児島方言話者の音調選択における世代差と言語イデオロギー

Generational Difference in Accentuation of Kagoshima

Japanese and Speakers' Language Ideology

太田一郎・光瀬めい*・二階堂整†

はじめに

Kubozono (2007), 窪菌 (2006) などでは、鹿児島方言若年層話者たちが、音調の選択（またはアクセント）において従来型の鹿児島方言音調ではなく、標準語の音調型と一致する有核（起伏式）／無核（平板式）音調を選ぶことが述べられている。太田 (2016), Ota, Nikaido, and Utsugi (2016) などは、話者の社会的特徴と文や談話など発話レベルでの音調選択の関連について統計的な検証を行い、メディア実践と関連する要因が関与している可能性を指摘した。本稿では、単語読みタスクの結果もくわえた高年層との世代間比較を行い、得られた結果を「言語イデオロギー」（シルヴァステイン 2002, 太田2004）の観点から解釈してみたい。

1. 言語イデオロギーと言語実践

まずはじめに、太田 (2004) をもとに、本稿で述べる「言語イデオロギー」という概念についてふれておく。Silverstein (1979:193)は、この概念を「使用者が言語の構造とその使用についての合理的な理由づけとして、または正当化・弁明として述べる、言語に対する信念」と定義している。¹そしてこのイデオロギーは、言語を使用する際に話者たちが「言語行為に持ち込む言語形態、意味、機能、価値」（シルヴァステイン2002:76）など言語全般に関与するもので、ことばの選択に際しては指標される社会的意味の参照枠組みとして機能する。話者たちは複数の手もちの形式からひとつを選んでことばによる行為を行うが、その意味では言語実践 (language practice) はつねに言語イデオロギーを背景に行われていると言える。

言語調査においては、しばしば地域変種と標準変種（共通語）の両方のスタイルでのデータ収集が行われる。とくに方言調査などでは、話者がもつ言語体系をいかに「引き出すか」ということが問題となる。しかしながら、その一方で、「体系」ではなく「ことばの選択」に注目する場合には、調査の方法によらず、得られたデータはすべて何らかの言語実践によるものであり、その背景にある言語イデオロギーとの関係で「なぜこのかたちが選ばれたのか」というとらえ方が可能になる (cf. 佐野2015)。言い換えれば、ことばの選択により話者が何を行おうとしているかを追うことができる。

* 元鹿児島大学大学院人文社会科学研究科大学院生

† 福岡女学院大学教授

¹ Milroy (2003: 161) による。

以下の議論では、スライドとリストによる単語の読み上げ、および単文読みと台本のある会話（以下台本会話）の2種類のタスクで採集した音声データにみられる音調型の選択を言語イデオロギーとの関係からとらえ、若年層話者の鹿児島方言の音調変異を考察する。

2. 調査と結果

2.1 調査概要

本稿の分析対象は、2010年から2012年に行った「複合アクセント句の音韻的従属（Prosodic Subordination in Multiple Accentual Phrase）の変異」に関する調査の一部である（太田ほか2012, Ota et al. 2012）。この調査自体は複合アクセント句（MAP）における音調を対象とするものだが、先述のとおり、単文読みと台本会話および助詞付きの語（名詞）の読み上げで音声データを採集した。

これらのデータのうち、本稿の分析対象は、音調型の入れ替えである。現在の鹿児島方言においては、図1と2に示すように、従来二型アクセントと呼ばれる音調でA型音調の語であったものがB型音調で、またはB型音調の語がA型音調で産出される現象があることが指摘されている（窪蘭2006, Kubozono2007, 竹村2010, 太田2012）。

	L L H もみじ	L H L かえで	L H L もみじ	L L H かえで
B型	L L L H もみじが	A型	A型	B型
		L L H L かえでが	L L H L もみじが	L L L H かえでが
			東京方言の起伏式に対応	東京方言の平板式に対応

図1. 鹿児島方言の音調型（従来型）

図2. 鹿児島方言の音調型（交替型）

従来は平板式のB型音調で発音されていた「もみじ」が起伏式のA型で、逆に従来は起伏式A型のはずの「かえで」が平板式のB型音調で発音される。この音調型の交替は、従来型の鹿児島方言では音調の下がり目のない平板式音調の「もみじ（LLH）」が、標準語では頭高の「もみじ（HLL）」と音調の下がり目を伴って（つまり起伏式音調で）発音されることをまねて、鹿児島方言でも「もみじ（LHL）」と下がり目を伴って発音されるようになること、または従来は起伏式の語が平板式で発音されるようになることである。言い換えれば、語内のピッチ下降のある・なし、つまりアクセントーションを標準語にそそえようとする現象と解釈できる。

2.2 各タスクの音声収録手順

2.2.1 スライドおよびリストによる単語読み

調査語彙は34語で、そのほか冒頭に練習用に3語を置いた。よって合計37語となる。34語の内訳は類別語彙表（国語学会編『国語学大辞典』（東京堂1980）のアクセントの事項参照）から25語と、MAP調査に盛り込んだ語9語（青森，長野，お土産，飲み屋など）から成る。ただし、「おにぎり」は単語読みタスクには含めているが，単文読みと台本談話には含めなかったため，分析からは除いた。また，練習用の3語も含めていない。読みはすべて格助詞「が」を付けて読ませ，方言スタイルと標準語スタイルのふたつのスタイルで収録した。ふたつのタスクをふたつのスタイルで上述の30人の話者に読ませたので²，データ数は

各スタイル：スライド読み：33語 x 30 = 990 リスト読み：33語 x 30 = 990
ふたつのスタイル合計：990 + 990 = 1980

となる。録音はすべてMarantz PM661デジタルレコーダーに，オーディオテクニカ ATM75 ヘッドウォーン型マイクロフォンで収録した。

1	水が	11	竹が	21	おにぎりが	31	牛が
2	村が	12	種が	22	猿が	32	鶴が
3	箸が	13	鳥が	23	顔が	33	歌が
4	雨が	14	橋が	24	宮島が	34	煮魚が
5	長野が	15	雪が	25	海が		

表2 スライド読みタスク語順（番号の順に読む）

² 高年層話者は1933-1955年生まれ，若年層話者は1987-1992年生まれである。

2モーラ名詞										語類
1	牛が	6	顔が	11	鳥が	16	竹が	21	水が	1類
2	石が	7	歌が	12	橋が	17	村が	22	雪が	2類
3	足が	8	色が	13	波が	18	馬が	23	島が	3類
4	海が	9	種が	14	箸が	19	船が	24	麦が	4類
5	秋が	10	雨が	15	猿が	20	声が	25	鶴が	5類

3, 4モーラ名詞			
26	青森が	31	飲み屋が
27	長野が	32	宮島が
28	おみやげが	33	上野が
29	煮物が	34	煮魚が
30	おにぎりが		

表3 リスト読み語順（番号順に読む）

2.2.2 単文読みおよび台本談話

調査対象の語彙は表4の8語である。3音節語、4音節語のそれぞれでターゲットのMAPを構成する。その組み合わせと数は表2と3に示すように、連結部分の助詞を含めると、単文読みタスクではMAPの数は合計16、台本会話タスクでは合計8となり、方言と標準語のそれぞれのスタイルで各話者24個（ただし、語の数の合計は48個）のデータを収集した。方言と標準語それぞれのスタイルで得られた各話者24個のデータの30人分（高年層10名および若年層20名）は、MAP合計360個（合計語数は720語、全体で1440語）になる。

音節数	前部要素（地名）	後部要素（一般名詞）
4	青森（B）【起伏】	おみやげ（B）【平板】*
	宮島（A）【平板】	煮魚（A）【起伏】*
3	長野（B）【起伏】	飲み屋（B）【起伏】
	上野（A）【平板】	煮物（A）【平板】

表4. 調査語彙（単文読みおよび台本のある会話において）

アルファベットは従来の鹿児島アクセント型を、【 】内は標準語の音調を示す
*は鹿児島方言と標準語の音調型（平板か起伏か）がもともと一致している語である

単文読みタスクにおいては、以下のような文をリストのかたちで調査協力者に提示し、できるだけ自然に読むよう求めた。

語1 語2
[青森 の][おみやげ を] たくさんもらった

図3. 調査文の例（単文読み）

台本会話タスクにおいては、方言話者同士2人1組で用意された台本を参照しながら、1分程度の短い会話を行わせ、その音声を収録した。

3. 結果：選択された音調型

本稿では、H/Lトーンの配列が完全に一致したかどうかではなく、音調の型の一致（すなわち、有核型の音調か無核型の音調か）という点に焦点をあてて論じる。以下3.1と3.2では従来型と革新型の音調の出現のようすを世代差を中心に整理する。3.3では世代差にくわえて、MAPの音調型の組み合わせが従来型の鹿児島方言と標準語のどちらと一致しているかによって、音調型の選択のあり方とその要因を考える。

3.1 単語読みタスク

以下の表中の略語の意味をまとめて示しておく。

elderly=高年層 young=若年層
PPT=スライド読み WL=リスト読み
KJ=鹿児島方言スタイル Std=標準語スタイル
traditional=従来型音調 innovative=革新型音調
ACC=標準語有核型音調への一致 UNACC=標準語無核型音調への一致
a=有核音調（下がり目をともなう起伏式） u=無核音調（下がり目のない平板式）

3.1.1 25語（2音節語）

表5aをみると、方言スタイルでは高年層がスライド読み（81.6%）、リスト読み（80.4%）ともに従来型の音調を安定して産出している。若年層も両方の読みでかなりの程度まで従来型音調を産出しているが（56.0%と64.4%）、高年層ほど安定していない。また、どちらの世代もスライド読みでは、標準語と音調タイプが一致する革新形の有核型（innovative ACC）が、リスト読みでは革新無核型（innovative UNACC）の割合が多くなる。ひとつには、リストでは検査語は1～5類の順でならんで提示されるため、音調の類推がつくことによると思われる。もうひとつ注意すべきは、後述の内容とも関連するが、どちらかの音調を選ばねばならない際には、何らかの手がかりがなければ有核音

調を選ぶ傾向にあるのではないかと疑われる点である。そのため、語の並びからの推測が可能なリストでは無核音調が増えるが、単語だけが脈絡と関係なく表示されるスライドでは有核音調が多くなるのではないかと考えられる。

表 5 b. の標準語スタイルでは、若年層の標準語音調産出は高年層のそれを大きく上回っている。若年層の方言と標準語のバイリンガル度を考えれば当然のことだが、それでも80%を少し上回っている程度であり、日ごろ標準語として産出される音調には多少の揺れが生じていることが推測される。

	25 words PPT in KJ			25 words WL in KJ		
	traditional KJ tone	innovative ACC	innovative UNACC	traditional KJ tone	innovative ACC	innovative UNACC
elderly N=250	204 81.6%	21 8.4%	1 0.4%	201 80.4%	3 1.2%	29 11.6%
young N=500	280 56.0%	112 22.4%	46 9.2%	322 64.4%	45 9.0%	92 18.4%

表 5 a. 2 音節語読みの結果 (方言スタイル)

	25 words PPT in Std Std tone	25 words WL in Std Std tone
elderly N=250	126 50.4%	124 49.6%
young N=500	418 83.6%	402 80.4%

表 5 b. 2 音節語読みの結果 (標準語スタイル)

3.1.2 8語 (3, 4音節語) 読み

	8 words PPT in KJ			8 words WL in KJ		
	traditional KJ	innovative ACC	innovative UNACC	traditional KJ	innovative ACC	innovative UNACC
elderly N=80	62 77.5%	2 2.5%	0 0.0%	58 72.5%	1 1.3%	0 0.0%
young N=160	69 43.1%	28 17.5%	18 11.3%	83 51.9%	26 16.3%	19 11.9%

表 6 a. 3, 4音節語読みの結果 (方言スタイル)

3, 4音節語の傾向も、表 6 a, b に示すように、2音節語と大きく変わらない。高年層の従来型が安定し (77.5%と72.5%)、若年層では標準語型の産出が多くなる (28.8%と28.2%)。ひとつ異なるのは、スライド読みでもリスト読みでも革新有核型が無核型より多い点である。理由はよくわからないが、標準語では平板音調の「うえの (上野)」を語頭有核の [う]えの と読む話者がいたことなど、語彙的な問題によるものと思われる。

	8 words PPT in Std	8 words WL in Std
	Std ACC	Std UNACC
elderly N=80	31 38.8%	30 37.5%
young N=160	138 86.3%	140 87.5%

表 6 b. 3, 4音節語読みの結果 (標準語スタイル)

3.2 単文読み+台本会話タスク

表 7 は、MAP内のふたつの語の音調のうち、少なくともどちらかひとつで革新音調が使われた場合の出現のようすを示している。このふたつのタスクは、自然な発話ではないものの、単語単独の単語読みタスク (表 6 a, b) とは大きく異なり、革新音調型の出現が両世代ともかなり多くなる。3.1.2の結果は、話者たちは各語に備わる音調型についての辞書 (lexicon) レベルの知識をもっていることの現れと言えるが、一方表 7 が意味するのはように、現実の運用ではその知識とは異なる音調型を産出する傾向があり、

それはとくに若年層に顕著であるということである。言いかえれば、発話レベルの言語実践においては、何らかの理由で語彙知識以外のものが産出に関与していることがうかがえる。

	sentence/discourse in KJ		sentence/discourse in Std	
	innovative ACC	innovative UNACC	ACC	UNACC
elderly N=240	96 40.0%	68 28.3%	159 66.3%	84 35.0%
young N=480	313 65.2%	246 51.3%	432 90.0%	388 80.8%

表7. 単文読みと台本会話における革新音調型の出現（方言と標準語スタイル）

3.3 MAPの音調型と鹿児島方言／標準語の対応

3.3.1 従来型方言音調と方言スタイルで産出された音調の対応

表8～10は、方言スタイルと標準語スタイルで産出された音調型 (Produced Tones) がそれぞれ従来型鹿児島音調と標準語の音調とどの程度対応するかを示したものである。表中の **u** は音調の下がり目がない無核音調を、**a** は音調の下がり目をともなう有核音調を表す（たとえば、**uu** はMAPの音調が無核+無核であることを意味する）。標準語ではそれぞれ平板式アクセントと起伏式アクセントが、鹿児島方言ではB型アクセント（音調）とA型アクセント（音調）に対応する。先述のように、**H**トーンと**L**トーンの配列が語全体で完全に一致するのではなく、「下がり目があるかないか」で標準語音調と対応あり／なしの判断をしている。

まず、表8 a, b の従来型鹿児島音調と産出された音調の対応を見る。世代をくらべると、従来型方言音調と一致する組み合わせは、4つのパターンの中で多少の差はあるものの、高年層で安定している（太枠内の合計73.8%）。4つの組み合わせの産出はどれかひとつに大きく偏っているわけではないが、どちらの世代も **aa** (有核+有核) の産出が多く、とくにその傾向は若年層の方が顕著である (35.6%)。また、若年層は各産出の組み合わせで従来型と一致しない組み合わせも多く出現している。つまり、若年層の音調産出は方言スタイルではゆれが大きいということになる。

elderly N=240		Produced Tones in KJ			
		uu	ua	au	aa
Traditional KJ Tones	uu	15.8%	2.1%	3.8%	3.3%
	ua	1.3%	17.9%	1.3%	4.6%
	au	0.0%	1.7%	20.4%	2.9%
	aa	0.4%	1.7%	3.3%	19.6%
	sum	17.5%	23.3%	28.8%	30.4%

表 8 a. 従来型鹿児島音調と産出音調の対応（方言スタイル）【高年層】

young N=480		Produced Tones in KJ			
		uu	ua	au	aa
Traditional KJ Tones	uu	6.7%	1.7%	10.8%	5.8%
	ua	2.1%	6.9%	1.7%	14.4%
	au	8.8%	4.4%	7.7%	4.2%
	aa	2.9%	10.0%	0.8%	11.3%
	sum	20.4%	22.9%	21.0%	35.6%

表 8 b. 従来型鹿児島音調と産出音調の対応（方言スタイル）【若年層】

3.3.2 標準語型音調と方言スタイルで産出された音調の対応

表 9 a, b は標準語音調と産出された音調の対応を示している。ある意味で表 8 a, b の裏返しの結果でもあるが、その内容は必ずしもミラーイメージというわけではない。高年層は、上述の従来型との対応の裏返しで、標準語音調との一致は激減している (10.0%) こと、またMAPの前部要素（語）で有核音調の組み合わせ (au, aa) が標準語型の無核音調 (uu, ua) に対応していることなどが見られる。若年層は高年層より一致率は多いものの (36.9%), 従来型との対応 (32.5%) とそれほど大きな違いは見られない。また標準語音調の組み合わせではないものは両世代で見られ、標準語との対応という点からは、かなりゆれがあると言える。

elderly N=240		Produced Tones in KJ			
		uu	ua	au	aa
Std Tones	uu	0.4%	1.3%	12.9%	10.4%
	ua	0.0%	2.1%	10.8%	12.1%
	au	9.2%	9.6%	2.9%	3.3%
	aa	7.9%	10.4%	2.1%	4.6%
	sum	17.5%	23.3%	28.8%	30.4%

表9 a. 標準語音調と産出音調の対応（方言スタイル）【高年層】

young N=480		Produced Tones in KJ			
		uu	ua	au	aa
Std Tones	uu	8.3%	4.8%	4.2%	7.7%
	ua	3.3%	9.6%	4.4%	7.7%
	au	5.2%	3.5%	7.5%	8.8%
	aa	3.5%	5.0%	5.0%	11.5%
	sum	20.4%	22.9%	21.0%	35.6%

表9 b. 標準語音調と産出音調の対応（方言スタイル）【若年層】

3.3.1 標準語型音調と標準語スタイルで産出された音調の対応

つぎに標準語スタイルの場合の音調の対応である（表10a, b）。音調型組み合わせの一致率合計は、高年層が28.6%、若年層が75.8%である。高年層は各産出音調に標準語型と一致しないものが多く見られるのに対し、若年層ではその割合は少ない。また高年層では、aa が産出音調全体の半数ちかくを占め (45.8%)，一致する音調型としてもこの組み合わせがもっとも多い (13.8%)。若年層では一致する割合に組み合わせ間での大きな差はないが (15.6% - 21.9%)，もっとも多く産出されたのは同じく aa (32.3%) であり，つぎに多いのが au (28.1%) である。方言スタイル同様，標準語スタイルでもMAPの前部要素の語の音調型は有核型がより選ばれやすい傾向にあることがわかる。

elderly N=240		Produced Tones in Std			
		uu	ua	au	aa
Std Tones	uu	4.2%	4.2%	5.0%	11.7%
	ua	2.1%	7.1%	5.8%	10.0%
	au	4.2%	6.7%	3.8%	10.4%
	aa	3.3%	5.0%	2.9%	13.8%
	sum	13.8%	22.9%	17.5%	45.8%

表10 a. 標準語音調と産出音調の対応（標準語スタイル）【高年層】

young N=480		Produced Tones in Std			
		uu	ua	au	aa
Std Tones	uu	18.3%	1.5%	4.0%	1.3%
	ua	3.3%	15.6%	1.7%	4.4%
	au	0.2%	0.0%	20.0%	4.8%
	aa	0.0%	0.6%	2.5%	21.9%
	sum	21.9%	17.7%	28.1%	32.3%

表10 b. 標準語音調と産出音調の対応（標準語スタイル）【若年層】

3.3 産出された音調のかたよりについて

3.2 の結果から、ふたつのスタイルおよびふたつの世代で aa がほかより多く産出されることがわかった。この点については、前部要素の音調型が後部に同じ音調型を誘うのではないかという疑問があることを、太田 (2016) においても述べた。たしかに、表 9b や 10a のように、aa にはそのような傾向が見られると言えないこともない。しかしながら、たとえば表 8b, 9b のように、若年層の産出音調は aa 以外の出現率に大きな差は認められない。つまり、前部要素の影響は aa にかぎった話である。また、表 8a, 9a, 10b のように、au という組み合わせも aa にちかい出現率を示していること、無核音調の連続である uu は ua と同程度の割合を占めるにすぎないことなどを考えると、前部要素の音調の影響というより、前部要素が有核音調の組み合わせが選ばれやすい傾向にあるとみるほうが、これらの結果をより適切にとらえることになるだろう。

そうすると、問題はなぜ a(x) という型が選ばれやすいかということになる。その直接的な説明はここではできないが、関連する先行研究の知見などから、a(x)型が選択されやすい可能性を考えてみる。

考えられるのは鹿児島方言の音調の性質との関係である。鹿児島方言の語音調は、「語+付属語」がトーン配列を決める音韻的単位となる。つまり、語彙的に音調の下がり目の有無と位置が決まっている東京語などとは異なり、音調単位全体で下がり目の有無とその位置が決まるため、語の境界を越えた判断が必要になる。³ 3.1, 3.2で示すように、話者たちにとって語レベルでの判断は（若年層話者でも）かなりの程度まで安定した判断ができるようだが、文や談話など発話レベルでの音調産出は語レベルよりも明らかに不安定になる。前後の音調的環境などの影響もあろうが、とくに若年層は幼児期から標準語の音調にさらされることが多いこともあり、実際の発話の場では、方言色の強い無核 (B型) 音調を避けて有核音調が選ばれるのかもしれない (cf. 太田2012)。

また、方言話者の標準語アクセントの習得という点からの推測も可能である。崎村 (1989) は、無アクセント話者の標準語アクセントの習得においては、起伏式 (有核) のほうが平板式 (無核) より習得しやすいと言う。ピッチの下がり目があるほうが、音声的に目立ちやすいということなのかもしれないが、Lトーンを基本として語の末尾部分にHトーンをおくことで音韻的な目立ちを作る鹿児島方言は、話者たちのあいだでは「語尾が上がる」と認識されていることが多い。そのため、「上げる」のではなく「下げる」ことがより標準語にちかづくと感じられるのかもしれない。

さらに、木部 (1990) はA型 (有核) が鹿児島方言アクセントの「基本型」だという。外来語や新語などが鹿児島方言に取り入れられる場合には、ふつうB型ではなくA型になる。標準語的音調との接触などの点も含めて考察する必要があるように思われるが、よくわからないものには「とりあえずA型で対応する」ことが広く行われている可能性は高い。

これらの知見からもとくに明確な結論を引き出すことはできないが、有核音調が選ばれやすい傾向が鹿児島方言には見られることが、表8～10の結果と何らかのかたちで関連していることはありうると思われる。

4. 革新音調と若年層の言語イデオロギー

3.3の議論から、鹿児島方言話者たちには有核音調が標準語的であると認識されている可能性は否定できない。しかしながら、これには別の観点からの考察も可能である。表11a, b は、標準語の有核音調に対応したもの (ACC) と無核音調に対応したもの (UNACC) の内訳を調べたものである。パーセンテージの母数は、タスクで得られたト

³ このトーンの非固定性は、たとえば白勢 (2007) で示されるような幼児の音調の認識力不足にも影響を与えているのではないかと推測される。

一クン数全体ではなく、MAPのどちらかひとつが標準語の音調型と対応したものの数であり、その数はACCが313, UNACCが243である。

ふたつの表の結果をくらべると、標準語型と一致する産出音調の割合は、ACC 60.7%, UNACC 65.5% と無核音調との対応が上回っている。つまり、有核型にくらべて無核型のほうがより標準語的なMAP音調を産出していることから、無核音調は標準語への接近が意識されたものではないかと考えられる。

この点は、標準語スタイルの結果と関連させて考えるとさらにはっきりとした状況が見える。図4, 5は、横軸に2音節語の標準語読みの成功数（最大50, この場合は音調型だけでなくトーン配列も完全に一致している場合のみを数えている）を、縦軸に方言スタイルでの有核音調と無核音調の標準語型との一致数を示し、その関連を表している。また各データは、世代と性別が分かるように異なるマーカーで表している。

ACC N=313		Produced Tones in KJ		
		ua	au	aa
Std Tones	ua	64.7%	0.0%	19.4%
	au	0.0%	59.3%	22.6%
	aa	35.3%	40.7%	58.1%
Frequency		68	59	186

表11a. ACC一致の音調ごとの内訳

UNACC N=243		Produced Tones in KJ		
		uu	ua	au
Std Tones	uu	65.3%	32.9%	34.5%
	ua	13.6%	65.7%	0.0%
	au	21.2%	1.4%	65.5%
Frequency		118	70	55

表11b. UNACC一致の音調ごとの内訳

ふたつの図をくらべると、図4の有核音調と標準語読みには世代の差は見られるが、それ以外の傾向は読み取りにくいことが、また図5の無核音調のほうは世代差以外にも若年層のなかで個人差が見られることがわかる。ここでは、図5の右上方に布置された話者たちを中心に、話者の関心や日ごろの行動との点から無核音調産出との関連を考えてみたい。

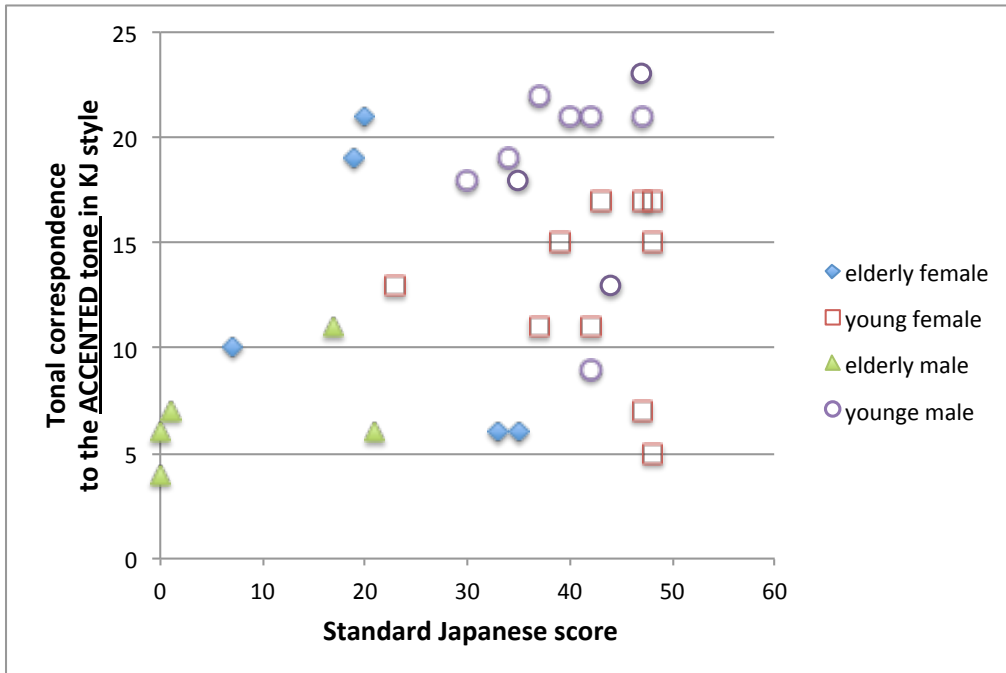


図 4. 有核音調の一致数と標準語読み成功の関連 (Ota and Nikaido 2015)

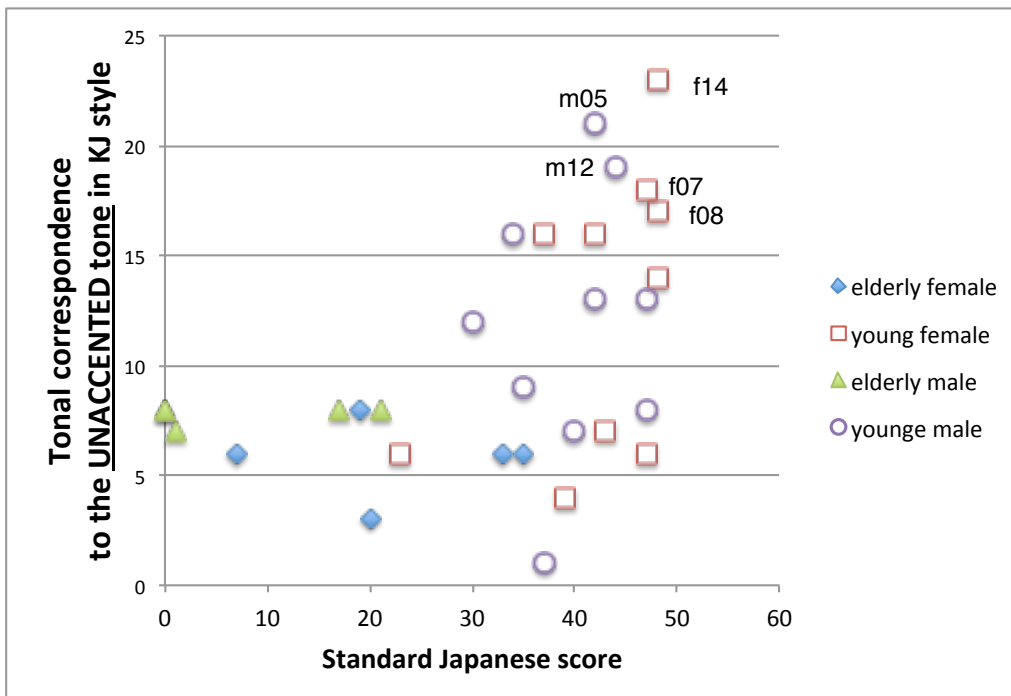


図 5. 無核音調の一致数と標準語読み成功の関連 (Ota and Nikaido 2015)

これらの話者の特徴としてあげられるのが、標準語読みの成功数が42~48と非常に多いという点である。表11bでの結果について言及したとおり、若年層の無核音調産出は標準語の無核音調とよく一致している。つまり、標準語型の産出がうまくできる話者の方が無核音調を多く産出する傾向にあると言える。しかしながら、若年層の標準語成功数は平均41と非常に多く、ほぼすべての話者が標準語の音調パターンについての十分な知識をもっているというのは決して過言ではない。⁴ では、これら上位の話者とほかの話者を分ける要因は何だろうか。ここではそのひとつの理由を1で述べた言語イデオロギーに求めたい。

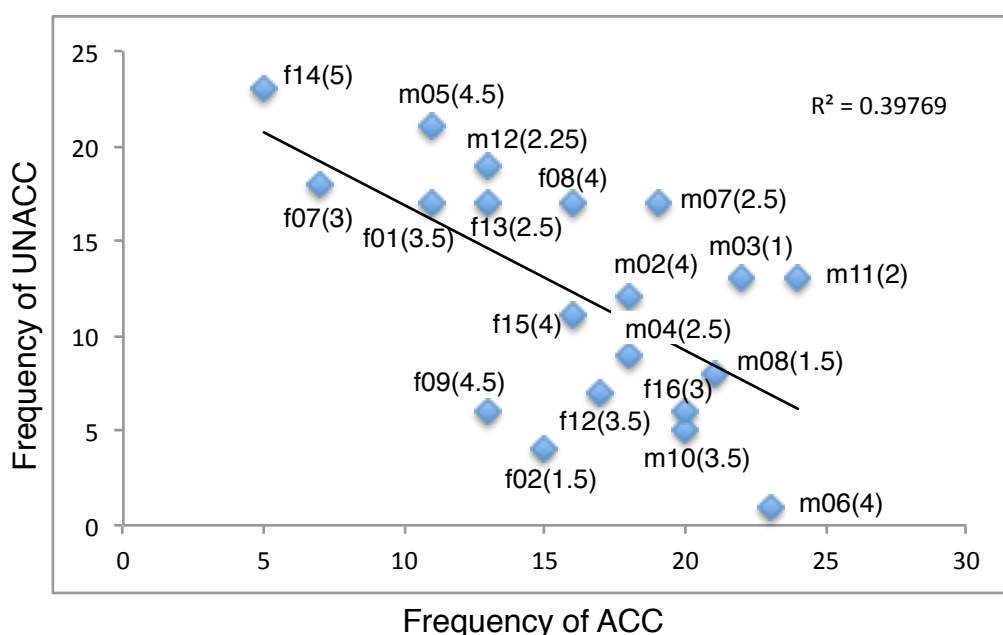


図6. 標準語音調と一致した有核・無核音調数とポップカルチャー番組の関連
データラベルは話者、()内の数値は番組視聴の得点（最大5，最小1）

若年層の調査協力者からは、社会的属性、社会的実践、社会ネットワーク、メディア実践などに関するさまざまな情報を質問票の形で得ている。メディア実践ではテレビ番組の視聴についての質問をしているが、アニメや歌番組のポップカルチャー番組の視聴、幼児期のアニメの視聴が無核音調型の産出を促進する要因となることがわかっている（太田 2016, Ota, Nikaido, and Utsugi 2016）。このポップカルチャー番組の視聴と単文読み・台本会話における産出音調の関係を示したものが図6である。

縦軸は標準語の無核音調と、横軸は有核音調との一致した語音調の数を示す。図6の全体を見ると、無核音調と有核音調の産出には負の相関があることがわかる。図6の左上は無核音調産出の多い話者たちである。図5同様、f14, m05などが見られる。また、

⁴ 教科書等を音読する場合、多くの学生が非常にうまく標準語音調で読む。

ここに布置された話者たちは、()内の得点が中間値の3以上のものが多く、アニメや歌番組などポップカルチャーに親和性のある者たちが多くと判断できる。地方においてもテレビ等では、首都圏の若者たちが平板式のアクセントを多用する姿をたびたび目にする機会があるが、メディアを通じてふれる平板な音調には「都会の」「ポップな」意味を感じることができ、そのことが無核音調の使用を後押しする言語イデオロギーの形成に一役買っていると推測される。

しかしながら、ポップカルチャー番組の視聴が必ずしも都会的音調との親和性を醸成することにつながるわけでもない。たとえば、図右下のm06は視聴の得点は4と高いにもかかわらず、無核音調をほぼ産出していない。これは、ひとつには有核音調への言語イデオロギーとの関連が考えられる。表10aのように、高年層話者は標準語スタイルにおいては有核音調の産出が方言スタイルよりかなり多い。鹿児島方言は基本音調がLトーン、標準語はHトーンであるため、下降する音調のほうがより音声的には標準語的に聞こえることなどの理由もあるかもしれないが、それにくわえて有核音調を多用する者は標準語志向の言語イデオロギーを強く意識しているのではないかと推測される。

逆に、f13のように視聴得点は2.5と決して高くなくても無核音調の使用は多い者もいる。この話者は、日ごろの行動を観察すると、ファッションなどの流行には非常に敏感であり、そのような「関心あるもの」と言語のあいだをつなげるイデオロギーが関与している可能性がある。⁵

また、f09のように、得点は4と高いものの、どちらの言語イデオロギーとも関連が弱く見える者もいる。この話者はとくにローカルな内容の番組などを好む傾向があり、その意味ではむしろ高年層に近い言語イデオロギーをもっているのかもしれない。

おわりに

スピーチ・コミュニティはことばを選択して話すことのルールを共有する人々の集まりを意味する (cf. 佐野2015)。本稿で述べたように、現実にはひとつのコミュニティにおいても複数の言語イデオロギーは多層的に絡み合って存在し、異なる言語実践で状況に応じてことばがどのように選択にされるかを方向づける役割を果たす。このような視点で考えると、相関分析ではとらえきれない現象に何らかの解釈をあたえ、スピーチ・コミュニティにおける言語事情の深部をとらえることができると予測される。

⁵ ほかに、同様に低い視聴得点で無核音調の産出の多いm12もいるが、調査時にf13のような情報が得られなかったため、なぜ無核音調の産出が多いのかを推測することはここではできない。

【記】

本研究の分担は次のとおり。取り上げた内容の分析および論文の執筆は太田がおこなった。光瀬は高年層の調査を、二階堂は調査語の選択を担当した。また、本稿は『人文学科論集』（鹿児島大学法文学部）vol. 84ですでに発表された論文が査読を経て新たに掲載されるものである。

参考文献

- 木部暢子 (1990) 「鹿児島市方言のアクセント法則」『方言音調の諸相 - 西日本 - (1)』 127-139. 文部省重点領域研究『日本語音声』報告書
- 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』岩波書店
- Kubozono, Haruo. 2007a. Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese. In Tomas Riad and Carlos Gussenhoven (eds.) *Tones and Tunes. Volume 1: Typological Studies in Word and Sentence Prosody*, 323-351. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Milroy, Lesley. (2003) Social and linguistic dimensions of phonological change: Fitting the pieces of the puzzle together. In D. Britain and J. Cheshire (eds.) *Social Dialectology: In honour of Peter Trudgill*. Amsterdam: John Benjamins.
- 太田一郎 (2004) 「言語変異の社会的意味と言語イデオロギー」『人文学科論集』, 60, 45-58, 鹿児島大学法文学部
- 太田一郎 (2012) 「日本語のメロディを考える」日比谷潤子 (編著) 『はじめて学ぶ社会言語学』, 155-175. ミネルヴァ書房
- 太田一郎, 高野照司, 二階堂整, 宇都木昭, 朝日祥之 (2012) 「日本語方言の音調変異について」, *Japanese Language Variation and Change (JLVC)* における研究発表 (2012年3月20日, 国立国語研究所)
- Ota, Ichiro, Shoji Takano, Hitoshi Nikaido, Akira Utsugi, and Yoshiyuki Asahi (2012) Sociolinguistic Variation in the Pitch Movement of Japanese Dialects. Paper presented at NWAAP Asia-Pacific 2, 2nd August, 2012 (at NINJAL, Tokyo).
- Ota, Ichiro and Hitoshi Nikaido. (2015) Tonal Variation of Kagoshima Japanese and Its Constraining factors. Paper presented at UKLVC 10 (University of York, UK), 3rd September, 2015.
- Ota, Ichiro, Hitoshi Nikaido, and Akira Utsugi. (2016) Tonal variation in Kagoshima Japanese and Factors of Language Change. *The Future of Dialects*. 389-397. Language Science Press.
- 太田一郎 (2016) 「鹿児島方言のアクセント型交替とその要因について」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』3巻 2号, 8-23.
- 崎村弘文 (1989) 「アクセントの起源をめぐる小考: または韻律論のために・続」『文献探求』 23, 12-16, 文献探求の会
- 佐野直子 (2015) 『社会言語学のまなざし』三修社
- シルヴァステイン, M. (2002) 「言語とジェンダーの文化: 構造・語用・イデオロギーが交差する領域」小山亘・徳地慎二訳『社会言語科学』第4巻第2号, 70-107.
- 白勢彩子 (2007) 「幼児の単語アクセントの聴取に関する方言比較による検討」『音声研究』11(3), 55-68. 日本音声学会
- 竹村重紀子 (2010) 『方言習得における親の母方言の影響』博士学位論文, 神戸大学大学院人文学研究科